

近代・現代…

スカラムーシュ 作品165b

【作曲者】

ミヨー (Darius Milhaud, 1892–1974 [フランス]) は、「フランス6人組」の一人。詩人であり外交官であるポール・クロードルの秘書として、1917年から18年までをブラジルで過ごしたことから、ブラジルの音楽やリズムが、彼の音楽に大きな影響を与えた。サンバを思わせるリズムや、ジャズなどである。また、複調性や多調性(同時に二つあるいはそれ以上の調性が鳴り響くこと)を用いることで、独特な響きをもたらす。

主要作品として、バレエ音楽「世界の創造」、ピアノ小品集「ブラジルの郷愁」、劇の付随音楽や映画音楽とあらゆるジャンルにわたって多数。吹奏楽では「フランス組曲」がよく知られている。

【楽曲について】

モリエールの喜劇『空飛ぶお医者』(演劇界では『トンデモ医者』と訳されている)の付随音楽(作品165a)に基づく2台のピアノ用の作品。1937年のパリ万国博での演奏のために作られた。後に自身によりサクソフォーンとピアノに編曲。サクソフォーンの重要なレパートリーにもなっている。

一方、ジャズ・クラリネット奏者のベニー・グッドマンのために、クラリネットとオーケストラのためにも編曲している。

「スカラムーシュ」とは、コメディア・デラルテと呼ばれる古いイタリアの即興喜劇の道化役。から威張りをする臆病者である。

第1曲 **Vif** (ヴィフ=元気よく)。第2曲 **Modéré** (モデレ= **Moderato**)。第3曲 **Brazileira** (ブラジルの女)。第3曲はサンバとなっており、親しみやすいリズムとメロディーが魅力である。

【鑑賞のポイント】

さまざまな編成でこの曲に触れ、それぞれの楽器の編成による表現の違いを感じてみよう。

(伊藤康英)

ラプソディ・イン・ブルー

【作曲者】

ガーシュイン (George Gershwin, 1898–1937 [アメリカ]) は、若い頃、ニューヨークのティン・パン・アレー (ミュージカル関係の会社が集まっていた一角) でピアノを弾いていた。1919年に作曲した歌曲「スワニー」のヒットにより一躍人気ソングライターとなる。

ヨーロッパにも渡り、ラヴェル、ストラヴィンスキー、シェーンベルクらとも親交があった。

代表作はオペラ『ポーギーとベス』(1934–35)。

【楽曲について】

1924年、ポール・ホワイトマン楽団の依頼により2週間ほどで作曲。2台ピアノ用に書かれた。管弦楽法に通じていなかったガーシュインに代わり、同楽団の座付き作曲家であり、組曲「グランド・キャニオン」などでも知られるファーディ・グローフェ (Ferde Grofé, 1892–1972) がオーケストレーションを行い、ガーシュイン自身のピアノと同楽団の演奏により初演された。楽団の編成は、管楽器を主体とした20名ほどのジャズ・バンド。これをグローフェは後に二度にわたり管弦楽用に書き改め、現在はピアノと管弦楽の協奏曲風の作品として演奏されている。

冒頭のクラリネットのグリッサンドに導かれたメロディーをはじめ、いくつかの印象的なメロディーを主軸に作品が構成されている。冒頭のグリッサンドは、初演時の奏者がグリッサンドで演奏してみせたところ、ガーシュインが気に入ったという経緯がある。

【鑑賞のポイント】

ガーシュイン自身が演奏した1924年の録音も存在しており(ただしSPレコードの時間制限の関係で若干カットされてはいるが)、この曲の原形を聴くのもよい。また、ジャズ・バンドによる新しい録音も何種類か出回っている。

(伊藤康英)